

Book Review

評者：堀内都喜子 ライター／フィンランド文化・社会

ネウボラから学ぶ 児童虐待防止メソッド

編集：横山美江／発行：医学書院

定価：3300円（本体3000円＋税10%）



ネウボラを知らない人も知識がある人も学びを得られる一冊

ネウボラはフィンランド語で「アドバイスの場」を意味し、フィンランドのどの自治体にもある無料のプライマリケアシステムの一つである。家庭環境や経済的背景を問わず、ほぼ国民全員が利用する制度（場所）として、約100年前から赤ちゃんとも母親、さらには家族全体の健康とウェルビーイングを支えてきた。そんなネウボラがこの10年ほど日本でも注目されるようになり、ここから妊婦・子育て家庭への伴走型支援実現のヒントを得ようとしている自治体は多い。しかし、本当の意味でフィンランドのネウボラを理解している人はまだそれほど多くはない。また、大事な要素を活かしきれないまま形だけの導入もみられる。

本書は、ネウボラをまったく知らない人から知識がある人まで、皆が学びを得られる一冊となっている。第1章ではネウボラの基礎をわかりやすく解説。第2章では主に児童虐待に対してどのような予防的支援を行っているかが、具体的な問いかけやアンケートの事例を交えながら紹介されている。何かが起きてからでは遅く、起きる前にリスクや課題を早期発見して予防していくという「予防的支援」は、フィンランドの社会保障には欠かせないアプローチである。したがって、子どもへの虐待だけでなく、パートナーとの関係や教育など幅広い分野の記事がこの章には含まれる。

第3章では家庭内暴力や虐待の疑いがある場合の対応、さらには加害者への支援も紹介されている。この部分では、フィンランドもまだまだ試行錯誤していることが見て取れるが、第2章と合わせ総じて幾重にも早期発見の機会やセーフティーネットが張り巡らされていることがわかる。また、子どもの安全とウェルビーイングを第一に、さまざまな人たちや機関が連携支援をしている。問題解決は一筋縄にはいかないが、民・官・学がともに努力する姿がうかがえる。さらに最終章では、日本への示唆が多く含まれる。フィンランドとは人口規模も医療制度も異なる日本で、どう工夫すれば導入可能なかが、具体的な事例に基づいて紹介されている。これだったら実現できるかもしれない、と希望を抱かせてくれる。

ネウボラは少子化対策のためではなく、子ども一人ひとりの心身の健康を保障する制度である。そのために、母親だけでなく、父親、きょうだい、家族皆の健康と幸せを観察し、「誰もがいつか問題やリスクを抱え得る」ことを前提にしている。この本は、自治体の母子保健に携わっている方はもちろん、教育関係者、医療従事者、子育てを支援する団体など幅広い人たちに気づきをもたらすだろう。